

第2回教育課程編成委員会 議事録

【日時】平成27年11月21日（土）15:00～16:05

【会場】こころ医療福祉専門学校 3階 会議室

【委員】出席：大木田治夫、志岐浩二、西原美由子（松尾峯子代理）、諸岡辰巳、池上功、石原義大、沖永さとみ、越本千加
廣瀬典治、柳樂聡治郎、山口三津城、藤村幸一、松本真一郎、野口大樹、恩村聡、坂口麻衣子、嶋津大地、濱中博之、松尾和香、舘川大輔、上原直樹、鈴木陽平（菊地貴子代理）、高島直哉、久保義哲、清木毅
委任状出席：有村俊男、松尾峯子、平田篤司、宗高志、井手浩二、久貝博、中嶋孝行
欠席：清川慎介、池田聡美
菊地貴子、中村裕也、松川征平

（敬称略）

1. 開会の辞（司会 藤村幸一）

本会の開会目的及び配布資料の説明を行う。

2. 委員の紹介（司会 藤村幸一）

各委員の紹介を行う。

3. 学校長挨拶（長崎校校長 廣瀬典治、佐世保校校長 柳樂聡治郎）

（廣瀬校長）ご多用の中、第2回教育課程編成委員会に参加していただき感謝申し上げます。第1回を5月に開催し、その時にいただいた意見を基に各学科で改善を図ってきたので、本日は各学科の取り組み状況について報告をする。その取り組みに対し、新たなご意見をいただければ幸いです。

委員の皆様には報告がある。来年度より、介護福祉科、セラピスト&フィットネス科において、留学生を受け入れることとなった。本日、両学科より説明があると思うが、これについてもさまざまな意見をいただければと思う。

（柳樂校長）佐世保校でも、5月の教育課程編成委員会でいただいた意見を基に教育を行ってきた。今後も企業が求める人材を育てるために改善しなければならない部分もあると思うが、さまざまな意見をいただきたい。

4. 理学療法科報告（学科長 濱中博之）

前回の委員会で志岐委員より、臨床実習の成績について質問があった。現在、最終的な

臨床実習の単位認定権は学校側にあるが、バイザーが100点中約60点の採点権を持っているため、バイザーが0点とした場合留年することとなる。症例報告会や、出欠等による加算点はあるが、採点の重きはバイザーにあるということである。

レポートの書き方の指導が不十分ではないかという意見だが、今年度の後期から、2年生の総合演習の中で、レポート作成法というコマを設定し、レポート作成を授業の中できちんと指導できるようにした。

今後の教育内容について、11月4日にリハビリテーション教育評価機構の現地調査を受けた。調査員は大学の講師である。一番大きな指摘は、カリキュラムの中での単位数が170以上であり、各学年で取得単位数にばらつきがあるため、改善した方が良いというものであり、今後整理したいと思う。また、教員について、現在6人中3人が理学療法士協会が行っている理学療法士養成施設等教員講習会を修了しているが、残りの3人も受講した方が良いとの指摘を受けた。現在も教員の質の向上について、きちんと意識しており、来年の2月に行われる、認定理学療法士の試験を2人受験予定であり、博士課程に進学する教員の育成を行っている。そして、進級率についてだが、平成23年度入学者のうち、平成26年度に卒業した学生が約60%であり、今後改善していく必要があるのではないかという指摘があった。そのことについては、教育内容はもちろんであるが、入学時での選抜方法についても今後検討し、よりモチベーションの高い学生の取得を考えている。

(質疑応答)

(大木田) 解剖学実習について、実際に献体を使用した実習は行っているのか。

(濱 中) 長崎大学の歯学部と連携して、2年次から献体を使用した解剖学実習を行っている。

(大木田) 学校によっては、教科書の授業のみの学校もある。理学療法士として、臨床を行う場合、実際に経験していると心構えが違う。

(藤 村) レポートの内容については改善がされているのか。

(濱 中) 症例レポートの書き方の指導は行っているが、実際に症例レポートを書かせるということができないため難しい。レポートの書式や、書かなければならない事項等の指導は出来ている。

5. 介護福祉科報告 (学科長 松尾和香)

校長のあいさつでもあったが、来年度より、介護福祉科で留学生を受け入れることとなった。介護業界の人材不足のため、単に人手として留学生を受け入れるだけでなく、きちんとした介護福祉士を養成して、社会貢献ができる学生を輩出したいと考えている。

昨日まで、介護教員の研修会に参加させていただいたが、現在留学生を受け入れている学校では、教科書にルビを振ったりなど、授業準備に時間がかかるという意見があった。会話ももちろん重要であるが、読み書きの指導というのも非常に重要であると感じた。現

在考えられる課題として、日本人学生でも難しい介護過程の講義や、実習施設不足、国家試験対策、教員不足ということが考えられる。実習施設については、2施設見つかっており、今後も各施設にお願いする予定である。教員不足については、増員を予定しており、日本語教員の採用も考えている。

留学生の入学について、学生や非常勤講師には伝えている。不安を口にする先生や学生もいるが、楽しみにしている学生もいるため、前向きに受け入れることができると考えている。

今後の教育について、前回の委員会で自分の想いを口にするのが苦手な学生が多いという意見があったが、ホームルームの1分間スピーチなど、発表の機会を増やしていきたいと考えている。

ボランティア活動に関して、現在は強制して参加させることはしていないが、今後は外部との関係のためにも強制参加を検討している。

(質疑応答)

(西原) 留学生に関して、言葉の問題がまず頭に浮かんだ。環境や風習に違いがあるため、留学生が日本の文化や風習を受け入れて、介護を行うことができるのか不安である。

(松尾) その通りだと思う。実例として、「トイレに行きませんか」と施設利用者に尋ねたときに、本当は行きたいが、「行かない」と答える場合もある。留学生の場合、言葉通りに受け取ってしまうため、難しい部分はあると思う。ただ、留学生にはコミュニケーション能力の高い学生もいる。入学する学生がどういう人柄なのか現段階では分からないが、きちんとした介護のこころを教えていきたいと思う。

(濱中) こころを教えるというのは難しい。留学生に講義を行ったことがあるが、表現がダイレクトであると感じる。思っていることをそのまま言葉にし、聞いた言葉をそのまま受け取る部分がある。すぐに教えるのは難しいため、段階的に身に付けられるように指導する必要がある。

6. 長崎校柔道整復科報告 (学科長 舘川大輔)

清川先生よりいただいた、実務研修を行った方が良いという意見に対しては、次年度より、総合演習という講義の中で、こころ鍼灸整骨院で実習を行いたいと考えている。

平田先生よりいただいた、卒業したばかりの者は医療人としてのマナーが低いと感じるという意見に対してだが、医療人としてのこころを教えるのは非常に難しいと感じている。常勤・非常勤に関わらず、講義の中で自分が治療を行ったときに感じたことや失敗談など、学生に考えさせるようなエピソードを話すようにしており、引き続きそういった講義を行っていきたいと考えている。

学生をトレーナー活動に連れて行くといいのではないかという意見に対して、人員不足のため、現在実現できていないが、解消され次第、実施する予定である。

紹介状の書き方の指導を行ってほしいという意見に対して、現在2年次の臨床実習という講義の中で、指導を行っている。

国家試験対策について、なるべく早く教科書を終わらせて、国家試験対策を早い段階で始めるといいのではないかという意見に対して、現在、運動学、リハビリテーション医学、関係法規の3つの科目が3年次の後期のカリキュラムになっている。この3つの教科全てを3年次の前期に移すのは難しいが、平成28年度には、リハビリテーション医学と関係法規は前期のカリキュラムにしたいと考えている。

理学療法科の話の中で、解剖学実習の話があったが、柔道整復科でも健康鍼灸科と合同で福岡歯科大学にて献体を使った実習を行う予定である。

(質疑応答)

(諸岡) 解剖学実習は何年次の学生に対して行うのか。

(舘川) 対象は3年生である。今年は1回のみ実施予定である。

(諸岡) 学生にとって良い経験になると思う。今後は回数を増やすようにしてほしい。

(石原) こころ鍼灸整骨院で実習を行うということだが、現在は実習を行っている学校は少ないため、今後実習をする整骨院を増やしていくことで、他校との差別化にもつながるのではないかと思う。

(舘川) 整骨院ごとで指導方法が異なるため難しいと思う。

(石原) 研修する整骨院を集めて、まず指導内容を標準化しなければならない。今後は実習を行う整骨院を増やすことも視野に入れて、取り組んでいただきたい。

7. 佐世保校柔道整復科報告 (学科長 上原直樹)

先ほども話に挙げたが、国家試験の合格率を上げるために、早い段階で教科書を終わらせることが課題である。現在の3年生は教科書が終わっていない科目が2科目ある。それ以外の科目では国家試験対策を行っている。次年度のカリキュラムでは、その2科目のうち1科目を3年次の前期に移す予定である。

今後の取り組みについては、これからの高齢社会に向けて機能訓練指導員について、講義の中で取り入れる予定である。柔道整復師の資格を取ると、老人ホームや介護福祉施設で機能訓練指導員として働くことが可能である。講義の中で機能訓練指導の実技も行う予定である。機能訓練指導員について指導することで、より体の構造について勉強する良い機会になるのではないかと思う。

(質疑応答)

(石原) 今年は初めての国家試験となるため頑張ってもらいたい。

(上原) 特に力を入れているのは、解剖学と生理学である。1、2年次から補習をきちんと行っているため、成績は良いと思う。それ以外の科目で不十分なところがあるため、今後はその部分も強化していきたいと考えている。

8. 長崎校健康鍼灸科報告 (主任 鈴木陽平)

前回留年生の割合について質問があったが、1年生は30名中2名、2年生は37名中2名、3年生は21名中2名が留年生となっている。留年生が在籍しているのは、昼間部のみで、18歳で入学した学生の割合が多い。学力不振が大きな原因であり、積極的な声掛けや、鍼灸師という仕事について話をするなど、学習意欲の向上につながる指導を心掛けている。

資料の22、23ページが健康鍼灸科のカリキュラムである。基礎、専門基礎、専門の3つの分野がある。基礎の分野に含まれる、保健体育、体力学は本校の理学療法科の教員に講義をお願いしている。生物学は本校の卒業生で高校の教員免許を持った先生をお願いしている。勉強が苦手な学生でも国家試験に向けてきちんと勉強ができるように、基礎の分野でも、専門、専門基礎といった国家試験のメイン科目につながるような講義をするようにしている。

本校では治療体験を実施しており、学生が治療院を訪問し、鍼灸の治療を受ける機会を設けている。今年度は2、3年生を対象に行い、モチベーションの向上につながったと感じている。また、3年生は福岡歯科大学の解剖学実習に参加している。現在は1回のみだが、今後は機会を増やしたいと考えている。学内の臨床実習も2、3年生合同で行っており、2年生が患者役、3年生が治療者役で実習を行っている。

国家試験について、本校では卒業試験を2回行っており、3年生の学習意欲を高め、国家試験合格を目指している。

地域の方への啓蒙活動として、サンデイツボ講座というものを行っている。卒業生の参加もあり、卒後研修にもなっていると感じている。現在は、同窓会創立を企画しており、1月に外部講師を招いて実施する予定である。

(質疑応答)

(池上) 当院でも約5名の学生が治療体験を行ったが、対象の学年全員が行ったのか。

(鈴木) 全員である。

(池上) 積極的な学生が多く、態度もよかった。素晴らしい学生が多かったので、先生方の指導の賜物だと思う。

専門学校の第1の目的は国家試験の合格であるが、試験合格後は勤務するか、開業するかということになる。私自身開業しており、開業することを考えている学生も在籍していると思うが、経営、マネジメント、集客などより実践的な

講義は行っていないのか。過密なカリキュラムの中、国家試験対策への圧迫にもなると思うが、そういった部分が他校との差別化につながるのではないかと
思う。

(鈴木) 経営に関する講義は現在行っていないが、社会はりきゅう学という科目では国家試験対策とは違う内容の講義を行っている。療養費の取扱いなど外部講師に講義を依頼する場合もある。

(池上) 鍼灸院と鍼灸整骨院の違いなど、自分が学生だった場合聞きたいと思う。

(鈴木) 総合演習という科目では、さまざまな意見を取り入れて毎年異なる内容の講義を行っている。今後は、他学科の教員に講義をお願いしたり、先ほどご意見をいただいた経営やマネジメントの講義を行うなどより良い講義に改善したいと思う。

9. 佐世保校健康鍼灸科報告 (教員 高島直哉)

前回の委員会で、国家試験の難易度、自分で考えることのできない学生に対してどのような指導を行っているのかという質問をいただいた。

国家試験の難易度は年々上がっていると思う。特に昨年は科目ごとの出題数に大きな変化があった。国家試験対策として、国家試験の過去問確認演習というのを実施している。毎週、過去10年分の国家試験から160問を抽出した問題を解かせるようにしている。ただ解かせるだけではなく、自己採点后、訂正ノートを作成し提出させており、その後教員がチェック、修正を行っている。現在は学生にも好評であり、モチベーションの向上にもつながっている。過去問演習とは別に毎月2回模擬試験も行っている。模擬試験の結果はデータにまとめ、成績不良者の選出を行っている。各学生の状況をきちんと把握し、科内で情報共有するようにしている。

自分で考えることのできない学生に対する指導に関して、自分で考えるためには一定量の知識が必要であるため、まずは通常のカリキュラムをこなしていくことが重要であると考えている。しかし、それだけでは臨床的な内容は難しいため、佐世保校では、開業している先生と連携して専門分野の実技指導を行っている。学術大会や技術大会の紹介もしていただいております、自主的に参加している学生もいる。また、治療院を複数経営している先生に依頼し、ライフプランニングのワークショップを実施した。例えば、10年後に開業したい場合、何年間でいくら必要か、それまでに何を頑張らなければならないのかなど学生自身が将来について考えるという内容になっている。そのほか、課外授業も実施予定であり、独立できる鍼灸師を育成したいと考えている。

(質疑応答)

(諸岡) 直接国家試験につながるような講義を1、2年次から行うことが大事である。

解剖学、生理学の重要な問題を1年次から取り入れることで、自分で考える力

を身につけてほしい。鍼灸師会では、外部講師の講演や、無料体験治療を行っているため、ぜひ参加していただきたい。

(高島) 現在も国家試験問題を基準に講義を行っているが、教員が大事な部分をまとめて教えているため、学生自身がどこが大事なのかを考えられるように今後改善したい。

10. セラピスト&フィットネス科報告 (学科長 久保義哲)

今年度までは整体療法、運動指導の2つの分野を扱っている学科であったが、来年度からはエステティックの分野を加えた3つの分野を扱う学科となる。必修科目の3分の2を減らして、それぞれの分野に特化した選択科目を増やしている。前回の委員会で、17の資格または認定証を扱っており、資格試験対策に力を入れているが、接客業でもあるので、人間的な成長、指導も学科の中で行ってほしいとの意見があった。本学科では、校外の実習にも力を入れており、さまざまなイベントでブースを設けて、ボディケアを行うなど、学生が人の身体に触れる機会を設けている。学生も実習を通してさまざまなことを感じており、その意見を基に授業を行うなど、疑問点をひとつずつ無くしていくようにもしている。

11月14、15日に開催されたベイサイドマラソンでもブースを出したが、230名ほどの利用があった。12月以降も4つの実習を予定しており、年間で約20回実習を行うようにしているため、就職先の企業からは良い評価をいただいている。

最後に、セラピスト&フィットネス科でも来年度から留学生を受け入れることとなった。日本人のクラスと留学生のクラスを別けて設ける予定であり、留学生用のカリキュラムは、目下調整中である。

(質疑応答)

(沖永) 整体分野の実習の機会を数多く設けており、素晴らしいと思う。運動指導系の実習は難しいと思うが1日見学実習など今後取り入れる予定はあるのか。

(久保) 運動指導系の実習を実施するのはなかなか難しいが、現在本学科の教員が高校の部活にトレーニング指導を行っており、今後関係を深めていくことで新たな実習の形になるのではないかと考えている。

11. トータル美容科報告 (学科長 清木毅)

来年5回目の国家試験を迎えるが、現在4年連続筆記試験全員合格である。実技で不合格だった学生もいるが、再受験して合格しているため、今のところ希望者は全員合格している。

カリキュラムについて、本校では美容室やエステサロンに就職する学生がいるため、美容総合演習Aを2つに分けており、A-aではヘアメイク、A-bではエステの講義を行っ

ている。美容総合演習Bでは筆記試験対策を行っており、選択科目だが全員履修している。現在も国家試験に向けて、放課後に実技の練習を行っている。国家試験合格も大事だが、離職率の問題もある。卒業生の追跡調査を行っているが、体調不良等を理由にやむなく辞めたり、他の職種に移った卒業生がいるのも事実である。

アルバイトをできるだけ美容室で行ってほしいという要望に関してだが、現在の学生は美容室以外では、飲食店でアルバイトをしている。基本的には接客業を行っているため、将来的にも役に立つのではないかと考えている。今後は国家試験が近づいているため、アルバイトも控えるように指導する必要がある。

ヘアメイクの科目では、日本髪の特講を行っており、今年度からはまつ毛エクステの実習を行う予定である。時代のニーズや美容業界の動向に合わせた指導を意識している。

エステ関係の特講では、技術以外で実際に仕事をするうえでの心構え等の指導を行っている。

(質疑応答)

(越本) まつ毛エクステを行うために美容師の資格を目指している学生も多いので、講義の中で取り入れることは良いことだと思う。

離職率に関しては、残念ながら辞めてしまった学生は、やむを得ない理由のため仕方のない事ではあるが、連絡を取り合える関係であるということは良いのではないかと思う。

(清木) 現在は SNS 等の普及により、連絡が取りやすいというのもあると思う。在校生についても、クラスだけの掲示板を利用して学生の状況を把握するようにしている。

1.2. 全体質疑応答

(濱中) 理学療法科は卒業後 9 割の学生が理学療法士会に入るため、連絡も取りやすく卒業後教育も行いやすい。鍼灸師会として、本校の健康鍼灸科に対して、業界としてどういう人材を養成してほしい等ご意見があれば伺いたい。今後は、教育課程編成委員会以外でも、卒前・卒業後教育の意見交換が出来ればより実践的な教育ができるのではないかと思う。

(諸岡) 鍼灸師の治療が命に関わると思っている方は少ないが、自然治癒力の流れに沿った治療を行わなければ大事になることがある。そういった部分は、学んだことを実践して経験していかなければならない。現代科学的な治療の仕方と、気の流れをみて行う治療は少し異なる部分がある。鍼灸院によって治療の仕方が異なる部分があるということを学生に周知し、門戸を広くしてほしいと思う。

(池上) 鍼灸というのは特殊性が高く一人親方な部分がある。排他的な部分もあると感

じるため、常識人としての教育を行ってほしいと思う。今後は鍼灸に対するそのようなイメージを改善していきたいと個人的には思っている。

(濱中) 実際の患者を治療するなかで、求められるものが変わってきているため、教員と、現場の先生が話し合っ、授業内容を現代の治療に合わせられるようにしていく必要があると思う。

1 3. 学校長挨拶 (長崎校校長 廣瀬典治、佐世保校校長 柳樂聡治郎)

(廣瀬校長) 学校側としては、現場の空気を感じる事が難しいが、このような機会を設けることで良い刺激をいただいている。本日の意見を参考にさせていただき、指導に活かしたいと思う。

留学生の受け入れに関しては、初めての事なので、今後はより連携を深めて指導を行っていきたいと思っている。今後ともよろしく願います。

(柳樂校長) 違う目線で見ることによって違ったものが見えてくると思う。本日は広い視野を持つことが必要だと改めて感じた。大きな課題をいただいたが、大変だからやらないではなく、どのようにしたら解決することができるのか考えていきたいと思う。

1 4. 閉会の辞 (司会 藤村幸一)

以上で本委員会を終了する。